

# 「新羅国ノ大王ハ日本ノ犬ナリ」考

(下)

金 光 哲

## 第三章 秀吉の朝鮮侵略と「鮮人」呼称

### (1) 朝鮮侵略の前夜

一九九二年四月十三日（日本暦十二日）は、豊臣秀吉の朝鮮侵略開始から数えて、四百年目の年であった。

秀吉が、佐賀の名護屋城に向け京都を出発したのは、文禄元年（一五五二）三月二十六日のことであった。宝暦十一年（一七六一）成立の『腐縄集』<sup>(56)</sup>によれば、

豊臣太閤、文禄元年、朝鮮征伐として進発の時、先日、伏見御香宮に参詣せらる。

とあって、出発の前に、祭神が仲哀・神功・応神の「御香宮」（京都市伏見区）に参詣したとする。これは、侵略開始四年後の文禄五年成立の『義残後覚』<sup>(57)</sup>巻一、「秀吉公御功宮にて御首途の事」に、

文禄元年三月朔日、最上吉日と申によって、其前日に太閤伏見御功の宮にて、御首途あるへしとて、諸臣を御供にて参詣します。とあって、事実であると思われる。また、秀吉の発言として、

太閤……そののち仰いたされけるは、……

「我、本朝の武将として、四海静謐の功を立、万民無事の政法をまもる。しかのみならず、<sup>(高)</sup>高城を退治して、本朝の威を一天にかゝげんと思ふなり。しかれハ、当社、昔時三韓を罰し給ひ、今にいたって我朝無為なり。その旧例を引て、当社にて門出をなし、……」

とあり、これによれば、神功皇后の「旧例」にあやかって、「御香宮」での門出を決めた。京都を出発した秀吉一行は、『豊鑑』<sup>(58)</sup>巻四、「高麗之乱」によれば、「忌宮神社」（山口県下関市長府）に立ち寄っている。

日をへて長門の府に至給ふ。こゝの御社は仲哀天王・神功皇后などをあがめ奉り、満干塩<sup>(ママ)</sup>の玉など、沖の方にふたつの島有。此、軍の誓ひ有御神なれば、分て拝し給ふなるべし。

「忌宮神社」については、例えば、昭文社発行の都市地図「下関市」に、沿革として「熊襲平定や三韓征伐の基地として、現在の長府の地に豊浦宮がおかれ」と、あたかも事実のように説明されているように、神功皇后・仲哀天皇が祭神で、かつ、仲哀天皇穴門豊浦宮であると喧伝される場所である。

この「忌宮神社」の沖合に、この神社の飛び

(56)名取壤之助編『桂女資料』所収、大岡山書店、昭和十三年

(57)『続史籍集覧』第七冊、臨川書店

(58)『群書類従』第二十輯

地である「干珠島・満珠島」の二つの島がある。連歌師・宗祇は、文明十二年（一四八〇）、山口から北九州にかけて旅行した。宗祇の『名所方角抄』<sup>(59)</sup>に、

豊浦嶋……。皇后の社壇ハ南向也。東西に遠干潟有。奥津・平津とて、二つ嶋あり。干満の二珠を被<sub>レ</sub>納<sub>ル</sub>云々。ミちひの島と申也。沖なる満珠なり。奥津也。汀ちかき干珠也。平津也。

とあり、紀行文『筑紫道行』<sup>(60)</sup>に、

沖中過る程に、満干る玉とかや言へる二の嶋を見るにも、<sup>からくに</sup>韓国の人さへ従ひけん昔有難し。

とあって、「乾珠満珠譚」が宗祇の民族心をくすぐっていたことがわかる。

忌宮神社は、足利尊氏が後醍醐天皇軍との戦いでの勝利を祈念し、また、祈願成就の法楽和歌を奉納したことなどで、世に知られた神社であり、「干珠島・満珠島」は、新神功皇后譚を象徴する「名所」であった。秀吉一行にとっても、そのような歴史的背景を十分に認識した参拝であった。「分て拝し給ふなるべし」と、二派に別れて「干珠島・満珠島」を参拝し、「<sup>いくさ</sup>軍の誓ひ有御神」神功皇后に勝利を祈念した。

福岡県志賀島の志賀海神社の神宮寺、吉祥寺の宮司は、秀吉の「御門出」を祝して、「縁起三巻」を「照覧に備え奉」っている。『大こうさまくんきのうち』<sup>(61)</sup>（太閤様軍記の内）』によれば、「縁起三巻」の内容とは、

……異国の大將軍、数万艘漕ぎいたし、火花をふらし、ふせぐ事夥しく、こゝにて皇后<sup>かんしゅ</sup>干珠の珠を投げかけ給へば、即時に干潮<sup>ひしほ</sup>

となる。夷狄船より降り立って、あひ戦ふところに、又満珠の珠を投げ給へば、海上もとのごとく満々と潮満ちきたり。太刀、刀におよはず、水に溺れ、<sup>じゅうてき</sup>戎敵ことごとく打死する。……さて、高麗都の岩に、「高麗の王は日本の犬也」と、皇后弓の弭にて書き付けをかせられ、……

というものであった。

現在、志賀海神社には、室町期作成の絵解き「掛幅縁起絵三幅」があり、二幅が「新神功皇后譚」を取り扱ったものである。この「縁起三巻」とは、この「掛幅縁起絵三幅」のことであろう。北九州には、『八幡大菩薩御縁起』絵巻の影響を受けて、南北朝期から室町時代に成立した一連の「掛幅縁起絵」がある。高良大社（福岡県久留米市御井町）の『高良社縁起』<sup>(62)</sup>は、縦約2.4m、横約2.1mの大きさのものであるが、中央左に「犬譚」が、下段左右に「乾珠満珠譚」が描かれている。

豊臣秀吉は、天正十五年（一五八七）の「九州征伐」のとき、六月五日にこの高良山に陣<sup>(63)</sup>を取っており、この『高良社縁起』を見た可能性がある。なぜなら、天正十三年、関白になった謝恩として、謡曲「弓八幡」以下五番を天皇の「叡覧」に供している。また、文禄二年名護屋城滞在中、「天下を治め、民を安ずる能」<sup>(64)</sup>である「弓八幡」を、秀吉自身演じている。

「弓八幡」のシテの翁の本体は「高良の神」であった。この神は、「乾珠満珠」を「龍宮」から借りるため、神功皇后が派遣した「使者」であり、また、「乾珠満珠」の投入役をつとめたため、別名「玉垂宮」と呼ばれた神であった。

(59)『名所方角抄』（寛文六年版）、柿衛文庫蔵（兵庫県伊丹市）

(60)新日本古典文学大系『中世日記紀行集』、岩波書店

(61)『大こうさまくんきのうち』、汲古書店

(62)図録『社寺参詣曼陀羅』、大阪市立博物館

(63)岩波文庫『太閤記』巻第十、「大隅日向知行割之事」

(64)岩波文庫『太閤記』巻第十四、「將軍於名護屋癸巳御越年之事」

秀吉は謡曲「弓八幡」を通じて、この高良の神に精通していた。したがって、高良の神の本場、高良社で掛幅縁起絵を見た可能性はきわめて高い。佐賀県三養基郡千栗八幡宮にも、室町期成立の掛幅縁起絵がある。秀吉は、これら掛幅縁起絵のうち、二つまで「照覧」していたのである。

ところで、久留米市の大膳寺玉垂宮の「玉垂宮縁起絵」(京都国立博物館保管)は、南北朝期の建徳三年(一三七〇)のもので、現存の掛幅縁起絵でもっとも古い。『高良玉垂宮御縁起』<sup>(65)</sup>は、室町期末から江戸初期の書写とされるものであるが、これに、

(新羅高麗百濟) 各作<sub>レ</sub> 礼拝<sub>レ</sub> 云。為<sub>レ</sub> 日本<sub>一</sub> 挿<sub>レ</sub> 野心<sub>一</sub> 可<sub>レ</sub> 蒙<sub>レ</sub> 天道之責。成<sub>レ</sub> 日本犬<sub>一</sub> 守<sub>レ</sub> 其御門。永称<sub>レ</sub> 西蕃、不<sub>レ</sub> 絶<sub>レ</sub> 春秋調貢。彼寛巖山有<sub>レ</sub> 五丈黒巖。依<sub>レ</sub> 勅宣<sub>レ</sub> 大將軍藤大臣下<sub>一</sub> 立山頂、以<sub>レ</sub> 御弭<sub>一</sub> 「三韓王、為<sub>レ</sub> 日本犬<sub>一</sub> 守<sub>レ</sub> 其御門<sub>一</sub>」、書<sub>レ</sub> 付驗文。今在之。

とある。「大將軍藤大臣」とは、「高良の神」の別名で、ここでは、「高良の神」が、「三韓王、為<sub>レ</sub> 日本犬<sub>一</sub> 守<sub>レ</sub> 其御門<sub>一</sub>」と、彫ったことになっている。

## (2) 「鮮人」呼称

一五五二年四月十三日、柳成龍の『懲毖録』<sup>(66)</sup>によれば、この日、釜山の沖合は「倭船」に海をおおいつくされ、海の涯が見えなかった。

四月十三日、倭兵犯<sub>レ</sub> 境。……是日、倭船自<sub>レ</sub> 对馬島<sub>一</sub> 蔽<sub>レ</sub> 海而来。望<sub>レ</sub> 之不<sub>レ</sub> 見<sub>レ</sub> 其際。釜山僉使鄭撥、出<sub>レ</sub> 獵絶影島。狼狙入<sub>レ</sub> 城。倭兵随、至<sub>レ</sub> 登<sub>レ</sub> 陸。四面雲集。

不<sub>レ</sub> 移<sub>レ</sub> 時、城陷。

この日、上陸した侵略軍は、小西行長の総指揮のもと、対馬の宗義智、平戸の松浦鎮信などの第一軍であった。侵略軍の殺戮はすさまじいものであった。松浦鎮信の家臣・吉野甚五左衛門の従軍記録『吉野甚五左衛門覚書』に、

敵は……家のはざまや、床の下。隠れかたなき者どもは、東の門にゆきたゝみ、皆手を合わせてひざまづき、聞もならぬから言「まのうまのう」と云事は、「助よ」とこそ聞へけれ。夫をも味方聞付す。斬りつけ、打ち捨て、踏み殺し、是を軍神の血祭り<sup>(67)</sup>と、女男も、犬猫も、皆斬り捨てて、斬り首は三万程とぞ見へにけり。

とあり、吉野自身「我こそ鬼にておそろしや」とするほど、徹底して「斬りつけ、打ち捨て、踏み殺し、切り取った「首」は三万という、地獄絵巻がくりひろげられた。

侵略軍は、翌日の十四日、東萊城を攻めた。禅僧・天荊の従軍日記『西征日記』<sup>(68)</sup>によれば、「三千餘級」を「斬首」し、「五百餘」を捕虜にした。そして、朝鮮軍を「鮮軍」と称した。五月十六日～十九日間に「鮮軍」を五回も使用、二十七日には「鮮兵」と称した。このように、朝鮮侵略が始まるやいなや、大量虐殺のなかで「鮮軍」や「鮮兵」の語を造語し使用した。

朝鮮側が日本側に送った六月二日の書簡は、「孔孟之語」をもって、「五倫五常刑法」の道理を説き、「禽獸之譬」をもって、虐殺行為を非難したものであった。僧天荊は、この書簡を「鮮人之書」と侮称した。このように、国土の蹂躪、文化遺産の破壊と略奪、民衆への虐殺の中で、「鮮軍」「鮮兵」「鮮人」「鮮民」「鮮女」

(65) 小林健二「大善寺玉垂宮縁起の絵解き」、『絵解き—資料と研究—』、三弥井書店

(66) 玄岩新書『懲毖録』、玄岩社(ソウル)

(67) 『続群書類従』第二十輯下

(68) 『続々群書類従』第三、史伝部(二)

の蔑視用語を造語したのである。

毛利輝元指揮の第七軍に従軍した禅僧・宿盧俊岳は、四月二十九日プサンで、「有禽有獸、自成<sub>(69)</sub>群」<sup>(69)</sup>と悪態をついた。そして、

昔時、神功皇后欲<sub>レ</sub>治<sub>二</sub>異国<sub>一</sub>。異国忽乞<sub>レ</sub>降。皇后聴<sub>レ</sub>焉<sup>(70)</sup>。……直以<sub>レ</sub>弓劃<sub>レ</sub>石曰、  
「唐土王者日本犬也」。

とする「犬譚」が、「至<sub>レ</sub>今、膾<sub>二</sub>炙世俗之人<sub>一</sub>口<sub>二</sub>矣<sub>一</sub>」<sup>(70)</sup>とするように、広く知れ渡ったものであることを強調したうえで、「神功無<sub>レ</sub>處<sub>二</sub>不<sub>レ</sub>聲名<sub>一</sub>」と神功皇后を絶賛した。そして、「忠州」(忠清北道)で、「皇后所<sub>レ</sub>劃之石」が「今安に在んや」と探しまわった。

林羅山の『豊臣秀吉譜』<sup>(71)</sup>下、慶長二年正月、唐島条「戸川肥後守」の注に、

又曰、神功皇后以<sub>二</sub>弓削<sub>一</sub>畫<sub>二</sub>巨石<sub>一</sub>云、  
「高麗王者、吾日本之狗也」。其石今尚存焉。

とあるように、戸川肥後守は、神功皇后の「巨石」現存説を主張した。戸川達安は、宇喜多秀家の家臣で、秀家指揮の第八軍に属した。この話は、同じ羅山の『梅村載筆』<sup>(71)</sup>人巻の記事がより詳しい。

戸川肥後守かたりて云。朝鮮へ入時に、都より一里ばかり外に麗婁と云所あり。河辺岩石多き内に、二丈ばかりの一石あり。其石面に、「高麗王者日本国ノ犬也」と刻めり。其字、大さ一尺ばかりありて、深く切入たり。麗婁は釜山浦より九日ほどあるとぞ。世に云伝る神功皇后の三韓征討の時にきざめるなるべし。

と、神功皇后の「巨石」が、「麗婁」の地に存在するとした。

神沢杜口の『翁草』<sup>(72)</sup>卷之四十三・四に、『戸

川記』が筆写されている。『翁草』は、寛政三年(一七九一)成稿のものであるから、『戸川記』はそれ以前に成立している。神沢杜口は、この『戸川記』について、「此書、元、戸川の家士が編む処にして、其主家を輝かさんと書るなれば……」とするのが、正しいであろう。『戸川記』は、『豊臣秀吉譜』の該当部分を引用したあと、

肥後守、朝鮮の人を自身一人も不<sub>レ</sub>剪<sub>レ</sub>之。其所以は、始め刀を抜て、鮮人を斬らんとする時、手を合せ声を揚て泣叫ぶ事、日本の婦童に劣る。……

と「鮮人」とした。また、この記事の前に、  
仍て同五月出船なり。肥後守魁船して一番に釜山浦へ着。……鮮兵此勢ひに辟易<sup>(73)</sup>して、忽壞北して後ろに有る川へ逃掛り、敗亡する処を追討して、数百の首を秀家の本陣へ遺す。是、備兵鮮兵との戦、手始なり。

と、「鮮兵」「数百の首」を、主家・秀家の本陣に届けた、とする記事がある。『戸川記』の「鮮人」「鮮兵」の語は、戸川肥後守の神功皇后の「巨石」現存説と、不可分の関係にある。

「鮮人」呼称は、秀吉の侵略時に、以上のような思想的背景をもって成立したものであった。江戸時代においても、「鮮人」等の呼称は、秀吉の朝鮮侵略と関連して使用された。

## 第四章 江戸時代の朝鮮観の諸相①

### 一 狛犬と絵馬一

#### (1) 朝鮮観のとらえ方

ある一定の時期を除外して、残りの時代を性格づける方法論が成立するのか、しないのか、

(69)『宿廬稿』、『統群書類従』第十三輯下

(70)大阪府立・中之島図書館蔵

(71)『日本随筆大成』第一期、第一巻、吉川弘文館

(72)『日本随筆大成』第三期、第一巻

(73)拙稿『「鮮人」呼称について』、『こべる』No.170、京都部落史研究所

ここでは問わないが、朝鮮と日本の関係史において、室町時代から江戸時代までの四百年間の歴史から、豊臣秀吉による朝鮮侵略の歴史を除外して、残りの時代を「善隣と友好の時代」とする見解が存在する。

姜在彦氏は、「室町・江戸時代の善隣関係」<sup>(74)</sup>において、

少なくとも一四〇四年に両国に交隣関係がはじまって、一五九二～九八年の豊臣秀吉による朝鮮侵略の時期を除いて、一八六七年に徳川幕府が大政奉還し、王政復古がなされるまでは、じつに四百数十年にわたる交隣と交流の歴史があった。

とし、「交隣＝善隣関係の歴史」とする。

「朝鮮通信使」との交流を過大に評価して、江戸時代を「善隣と友好の時代」と見る立場の人々は、論者によって若干の違いはあるが、江戸時代における負の朝鮮観、朝鮮蔑視観の「伝統性」を否定する。例えば、姜徳相氏は、「日本の朝鮮支配と民衆意識」<sup>(75)</sup>において、

日本の朝鮮蔑視観は伝統的であるとか、「太古の昔」からあるという人もいる。しかし、かりに江戸時代をとりだしたとき、江戸の庶民のなかに蔑視観が体質化していたかどうか、疑問をはさまずにいられない。ある特定の階層の個人をとりあげれば蔑視思想はあったかも知れないが、民衆の常識とはとうていいえないばかりか、むしろ逆であったといえよう。

とするように、江戸時代の「庶民」の蔑視観の存在を否定し、「ある特定の階層の個人」に蔑視思想は「あったかも知れない」とする。

姜徳相氏は、次のように「三韓征伐」物語のルーツに言及するが、これは「ある特定の階層

の個人」における蔑視観の内容ということであろう。

私は神功「三韓征伐」物語のルーツは、江戸中期以降の尊皇討幕思想に求めることができるように思う。尊皇討幕と朝鮮朝貢国論にどんな関係があるのか、それは尊皇思想の根幹がいわゆる国学であり、運動のモチーフが古事記、日本書紀の世界への復古を意図したことで説明できる。

とする。

つまり、「ある特定の階層の個人」の蔑視観の内容である、神功皇后の「三韓征伐」物語のルーツは、「国学」を根幹とした「江戸中期以降の尊皇討幕思想」（「江戸中期以降の尊皇討幕思想」の曖昧な表記については問わない）に起因するとする。一方で、差別思想の「発生時期」については、

……幕末の国学者、経世家はこの古事記、日本書紀を文献批判やイデオロギー批判なしに素読し、尊皇討幕思想のよりどころにしたのである。したがって古事記、日本書紀を史実としてふりかざせば、古代朝鮮は日本の版図であり、朝貢国であるとの認識がでてくるのは当然であり、日本優位、朝鮮劣位の落差に差別思想が発生し、……

と、「幕末の国学者、経世家」が、古事記・日本書紀を「尊皇討幕思想のよりどころ」にし、そこから「差別思想が発生」したとし、朝鮮蔑視論「幕末発生説」を主張する。

ところで、

朝鮮輕侮論の侵略思想への転化は、一八一一年通信使外交の終始と、その後急速な尊皇討幕派の風圧の強まりのなかに一つのみちすじがあるようである。

(74)『季刊三千里』37号、三千里社

(75)姜徳相「日本の朝鮮支配と民衆意識」、『歴史学研究』

1983年度歴史学研究会大会報告一、青木書店



としており、徳川幕府が朝鮮通信使を対馬で応対した文化八年（一八一）以降の、「朝鮮輕侮論の侵略思想への転化」に言及するから、この年以前の「朝鮮輕侮論」の存在を前提としなければならず、幕末発生論と矛盾する。このように、姜徳相氏の朝鮮蔑視論の発生時期を一つとっても、研究大会の報告という制限性はあるとしても、あいまいで、粗雑という感じはいない。

李進熙氏は、『李朝の通信使』<sup>(76)</sup>において、

……日本人の朝鮮観の歪みは伝統的な根深いものではなくて、近代日本の「国策」のもとにつくり出され、拡大されたものなのである。（P229）

として、朝鮮蔑視の「伝統性」を否定するばかりか、「朝鮮観」の「歪み」は、明治以降の近代に作り出された、とする。そして、「朝鮮観の歪み」の「芽ばえ」なる概念を中井積善（竹山）に発見する。

十八世紀末に芽ばえた朝鮮蔑視の思想は、十九世紀に入ると暗い影をおとしはじめる。すなわち、十八世紀ごろから「海防論」が台頭するなかで、大阪の儒者中井積善が十八世紀の末年、老中の松平定信に『草茅危言』をおくり、……（P225）

ここで問題になっている中井積善は、『草茅危言』<sup>(77)</sup> 卷之四、「朝鮮の事」で、

一、神功の遠征已来、韓国服従朝貢。我属国たる事歴代久しく絶ざりしに、今の勢是に異り。……一時の権を以、隣交を修め給ふ御事成しかば、渠も以前の如く、我皇京に朝貢するに非ず。唯、好を江都に通ずるのみなれば、属国ともなし難く、聘使を待（つに）客礼を以せざる事能はず。

と発言している。

仲尾宏氏の朝鮮蔑視観の成立観は、以上とはすこし違う。『朝鮮通信使の軌跡』<sup>(78)</sup> 序章において、

朝鮮蔑視観は明治政権下の日本近代特有のイデオロギーではなく、前近代における日本人の小中華意識の中にすでに胚胎していたとみなければならない。

と、朝鮮蔑視観の「胚胎」が、前近代の「小中華意識」にあると強調し、次のように、文明二年（一四七〇）の『善隣国宝記』に、「胚胎」を求める。

……今、中世以降に限っていえば、モンゴルの侵攻を経て、足利政権初期の南北朝分裂、そしてその危機を補強するものとして持ち出された宋学的名分論が対外的に援用されたのが、『善隣国宝記』の義持批判であり、朝鮮に対する小華夷秩序、すなわち「日本の小中華意識」もそこから派生し、その頃から日本社会に根ざしているといえる。

仲尾宏氏は、この観点にたって、近代までの道筋を次のように描く。

……中井竹山建言を経て、幕末に近づくにしたがって蔑視観が浸透し、通信使に対する見方にも影響が現れてくる。そして平田国学を頂点とする国学意識は遂に「皇国史観」に発展し、明治新政権下の支配的イデオロギーに馳せ昇り、東アジア侵略の有力な思想的武器と化した。朝鮮侵略がその第一歩であり、……

姜徳相氏も、『草茅危言』を「尊皇征韓ナショナリズムのまえぶれ」としており、こうして見れば、姜徳相氏も、李進熙氏も、仲尾宏氏も共

(76) 李進熙『李朝の通信使』、講談社

(77) 『草茅危言』、『日本経済大典』第二十三巻、啓明社、

昭和四年

(78) 仲尾宏『朝鮮通信使の軌跡』、明石書石

通して、中井竹山の『草茅危言』の存在を契機に、蔑視観の転換を見ていることがわかる。

姜在彦氏は、「室町・江戸時代の善隣関係」において、

ところが幕末に、尊皇思想と征韓思想とがセットになって台頭してきた。その論拠は、神功皇后の「三韓征伐」以来、朝鮮は日本の「朝貢国」であったから、対等の関係を古代に戻すべきだという、きわめて一方的な論理である。

とし、また、「歴史のなかの朝鮮王朝」<sup>(79)</sup>で、

幕末になるとしだいに国学思想が台頭し、「神功皇后の三韓征伐」以来の朝貢国朝鮮が、日本との対等な交隣国であることに異義を申し立てる者が現われた。例えば吉田松蔭が……。徳川幕府から明治政府への権力交替は、このような対朝鮮観の転換と表裏をなすものであった。

とするように、徳川幕府から明治政府への移行に、「朝鮮観の転換」期を考えるから、姜在彦氏の蔑視観は、李進熙氏の考えと大差ないとみていいだろう。それは結局、基本的に江戸時代の朝鮮蔑視観の存在を認めないものであるから、せいぜい「芽ばえ」とする形容にならざるをえない。

また、蔑視観の内容としてあげる神功皇后の「三韓征伐」は、姜徳相氏にしても、姜在彦氏にしても、『古事記』や『日本書紀』の「神功皇后」観にとどまる。したがって、ここには、平安末期に出現して以降、継続して「朝鮮観」を規制してきた「犬譚」をはじめとする「新神功皇后譚」は、完全に視野にない。

室町時代については、室町幕府が「伝統的」朝鮮観を正したとすることによって、室町時代

を朝鮮観の「一大転換」期とする考えがある。辛基秀・村上恒夫共著『儒者姜沆と日本』<sup>(80)</sup>に、

それまでの日本の公家外交は、架空の神話伝承の神功皇后の「新羅征伐」以来、朝鮮は日本に朝貢すべきだという伝統的な考えに固執し、国際関係は無きに等しいものであった。公家外交を接收した足利幕府は、外交政策の一大転換をなしとげ、朝鮮に対する過った認識「上古往昔は来朝の貢賦であった」を正した。

室町以降、四百年間の「善隣と友好」を主張する人々にとって、朝鮮観の問題は、室町時代で解決済の問題として処理されてしまい、やっと、江戸時代の幕末をまって、あるいは、近代に入って生起される問題となってしまった。かくして、朝鮮観の問題は、前時代からの歴史の内在的發展として、連続性の中で思想的に把握されるのではなく、「善隣と友好」の美名のもとで、除外されてしまった。

## (2) 狛犬の由来説と「犬譚」

神社に行くと、社前の左右に一对の獣形をした石像物がある。向かって右側は口をすこしばかり開けている。左側は口を閉じており、一本の角があるものもある。普通、これらを「狛犬」とも、「高麗犬」とも書き、「コマ犬」と呼んでいる。正確には、右側が「獅子」で、口を開けて「阿吽の呼吸」の「ア」を表わす。左側が「狛犬」で、口を閉じて「ウン」を表わす。

奈良時代の「狛犬」の実例は、文献を含めて確認できない。奈良時代では獅子一对であった。それが平安時代に入って、狛犬と獅子の組み合わせになった。従来は、京都の東寺鎮守八幡宮の獅子が十世紀後半、石川県白山比神社の

(79)『季刊青丘』14号、青丘文化社

(80)『儒者姜沆と日本』、明石書店

(81)伊東史郎『狛犬』(日本の美術8)、至文堂

狛犬と獅子一対が、十一世紀前半のものとされていた。新聞でも報道された新発見の東寺の狛犬と獅子一対のうち獅子は、九世紀前半に比定されるもので、通説を変更<sup>(82)</sup>するものであった。

この狛犬と獅子の由来については、江戸時代にいろいろな説が取沙汰された。その中には例によって、「犬譚」と関連させていくつかの説があった。梅田義彦氏は、論稿「神像と獅子狛犬の研究」<sup>(83)</sup>において、

- ① 神功皇后、三韓を討從え給ひ、高麗人の率い來った犬に、門を守らしめられしに起こる。
- ② 神功皇后三韓征伐のとき、高麗に至り給うや、犬來って先導せしゆえ、軍進み得て功を遂げ給うたにより、その形を作つて高麗犬と名づけ、永くこれを示さんとして神社に置き、その守護とせられた。
- ③ 神功皇后の御時、三韓降伏して、永く犬のごとく臣属するを誓つたので、その形を神前に留めたという故事に基づき、これを高麗犬と呼ぶこととなった。
- ④ 神功皇后、三韓を征し給うとき、弓箭にて「三韓は日本の犬也」と岩石にしるし給うた縁により、三韓の犬宮内を守護するの心にて、狛犬を設けて宮内に、ひいてまた神社に置かれるのである。

と、四つの説をあげている。

#### 〔第一説〕

成嶋重岳撰『狛犬攷』<sup>(84)</sup>引用の源兼勝（収翠）の『惶根草』<sup>(85)</sup>は、元文二年（一七三七）に刊行されたものであるが、

或云、神功皇后三韓を討したがへ給ひつゝ、高麗人の率來し犬に、門を守らせ給ふの義

なり。

とある。神功皇后は高麗人を連行したが、その高麗人が連れていた犬に、門を守らせたという。これは、梅田義彦氏の第一説である。

#### 〔第三説〕または〔第四説〕

この『狛犬攷』には、貝原益軒（一六三〇～一七一四）の『神祇紀聞』が引用されている。それに、

獅子狛犬は、いにしへ神功皇后新羅を征し給ひ、其軍を返し給ふ時、弓はづを以て彼国の石に書して曰、「高麗の王は日本の犬なり」と。これを以、甚猛威を示さんために、宗廟の神前に狗を作り置くか。

とあって、この説は、梅田義彦氏の第三説といふことができる。

ところでこの説は、正徳三年（一七一三）刊行の『倭漢三才図会』<sup>(86)</sup>巻第十九、神祭にも、

呼曰、高麗犬。……神功皇后伐三韓時、皆降伏盟云「至子々孫々、如奴、如犬、永為戎守之臣也」。而以来、獻八十餘艘貢物、伝王子為質矣。

とあるように、「奴」のように、「犬」のように「戎守之臣」となると誓ったとし、

留其證於後世、作狛犬形、安于神前乎。

と、その証拠を後世に残すため、「狛犬形」に作り、神前に安置したとしている。

狂言大藏流の大藏虎明が、慶安四年（一六五一）に書いた『わらんべ草』<sup>(86)</sup>一に、

こま犬と云ハ、神功皇后いこくたいじなされ、「こま、もろこしの者ハ、日本の犬なり」と、石へきに、御だらしのはづにて、書付給ひ、そのせうこに、日本の社の前に、

(82)『獅子・狛犬』、京都国立博物館

(83)梅田義彦『神道の思想』3、雄山閣

(84)東洋文庫『甲子夜話統編』巻之十二、二十四、平凡

社

(85)東洋文庫『倭漢三才図会』

(86)岩波文庫『わらんべ草』、岩波書店



こま犬をすへおき給ふ。

とあり、これによりこの説が、正徳年より以前、すでに江戸時代の初期の段階に存在したことが判明する。

〔第二説〕

撰者不詳の『狛犬考』<sup>(87)</sup>がある。これは、巻末に「文化元（一八〇四）寅十月」とあり、これが成立年を示すものか、書写年を示すものかは不明であるが、これに、

一説曰、神功皇后ノ三韓ヲ征伐シ玉ヒシ時、高麗ニイタリ玉ヘハ、犬来リテ先手ヲセシヨリ、軍旅スミテ其功ヲトゲ玉ヒシユヘニ、其形ヲ作りテ高麗犬ト名付ケ、神社ノ守護神トナセリトイヘリ。

とある説は、梅田義彦氏の第二説である。

ところで、伊藤梅宇の元文三年（一七三八）の自序のある『見聞談議』<sup>(88)</sup>巻之一、五二に、

神社のこま犬、高麗犬と書く。神秘抄に神宮<sup>(ママ)</sup>皇后、三韓征伐の時、高麗に到り玉へば、犬一匹来りて先手をせしよりして、軍旅すゝみ功をとげさせ玉ふ。その形を作りて、……となづけ、神社の守護となせり。

とあり、『狛犬考』の「一説」が、『神秘抄』であることが判明する。同時に、『神秘抄』の説が、『見聞談議』の自序年から、元文三年以前からのものであることも確認できる。

〔第四説〕

この『狛犬考』には、別に、

或人説曰、神功皇后、三韓を退治の時、弓箭にて「三韓は日本の犬也」と岩石にしるし給ふと、其縁によりて三韓の犬、二十六時中、宮内を守護するころにて、狛犬を宮内に用るといへり。

とあって、梅田義彦氏の第四説は、この「或人説」によるものであることが判明する。

このように、すでに江戸初期から、狛犬の由来が「犬譚」を基礎にして、さらに尾ひれがついて、さまざまな説が流布されてきたのであった。

(3) 乗馬姿の神功皇后の絵馬

江戸時代の絵馬に反映された「神功皇后の朝鮮観」については、すでに拙稿「京都の絵馬と新神功皇后譚」<sup>(89)</sup>で論及した。しかし、巨石の前の乗馬姿の神功皇后の絵馬についても、説明しておかなければならない。

京都国立博物館と向かい合った「三十三間堂（蓮華王院）」に、貞享三年（一六八六）紀州の和佐大八郎が、「通し矢」八千八本の新記録達成を記念して奉納した絵馬がある。神功皇后が画面左はしの巖石に向かって、弓の弭で「新羅国の大王は……」と字を彫っている。中央やや右前に、ひざまづく武内宿祢。画面右半分に、「馬」の手綱を曳く従者が描かれている。この絵馬は、「犬譚」の絵馬で製作年のもっとも早い絵馬である。この絵馬は、元治元年（一八六四）に刊行された『花洛名勝図会』巻之四に、「臨写」の図が掲載されている。現在は、三十三間堂発行の『蓮華王院三十三間堂』と、入場者に渡す葉にカラーで収録されている。

足利義教が永享五年（一四三三）に、京都府八幡市の石清水八幡宮・大阪府羽曳野市の誉田八幡宮・大分県宇佐市の宇佐八幡宮のそれぞれ奉納した絵巻に、上陸する馬が描かれている。絵馬に馬が描かれるのは、これから影響をうけたのである。

(87) 温知叢書『狛犬考・近世奇跡考』、博文館、明治二十四年

(88) 岩波文庫『見聞談議』

(89) 拙稿「京都の絵馬と新神功皇后譚」、『京都民俗』第十一号、京都民俗談話会

京都には、ほかに次の二点が現存する。

●八坂神社（東山区祇園町）

これは、享保十三年（一七二八）のもので、中央に、弓の弭で字を彫る左向きの神功皇后、右に従者が二人。

●城南宮（伏見区中島）

これは、文政三年（一八二〇）のもの。「三十三間堂」の絵馬とほとんど同じ構図だが、不鮮明なため馬が描かれているか、どうかは確認できない。

さて、江戸時代中期以降、『八幡大菩薩御縁起』系統の絵巻でも、たとえば、高津古文化会館（京都市）蔵のように、巖石の前の神功皇后は、乗馬姿として描かれるようになった。この影響を受け、絵馬の神功皇后も乗馬姿で描かれるようになった。

●「神功皇后と武内宿祢図」<sup>(90)</sup>

山形県東田川郡余目町 八幡神社

安永九年（一七八〇）

これは、画面中央に、乗馬姿の神功皇后。右下にひざまづく武内宿祢。管見では、乗馬姿の絵馬でもっとも古い絵馬。

●「武者絵」<sup>(91)</sup>

岐阜県武儀郡武儀町 日竜峯寺

寛政十一年（一七九九）

これは、左に馬を曳く従者、中央に乗馬姿の神功皇后。右に武内宿祢。

●「神功皇后図」<sup>(92)</sup>

愛知県碧南市久沓町 白山社

文化十一年（一八一四）

これは、画面中央から右に神功皇后。神功皇后の前に降伏する新羅軍。左に、新羅軍に向かっ

て威嚇する武内宿祢。

●「八幡太郎義家図」<sup>(93)</sup>

茨城県龍ケ崎市馴馬 日枝神社

文政十一年（一八二八）

左側に、中央の神功皇后に向かってひざまづく武内宿祢と従者。「八幡太郎義家図」とするのは、後述のように間違いである。

●「騎馬武者図」<sup>(94)</sup>

埼玉県戸田市美女木 八幡社

年代不明

左側に降伏した新羅軍。神功皇后の右前に、新羅軍に向かって威嚇する武内宿祢。この絵馬の巖石をよく見ると、

□□

大王□

日本

の文字が読解でき、「□□大王 [ハ] 日本 [ノ犬ナリ]」であることに、間違いがない。

さて、「犬譚」の絵馬には、乗馬姿の神功皇后一人だけが描かれている絵馬が二点ある。

●「巴御前」<sup>(95)</sup>

長野県松本市安曇郡三郷村 熊野神社

安政四年（一八五七）

「巴御前」とするが、左向きの姿勢で弓弭を巖石に向ける構図から、馬上の女性はやはり神功皇后とするのが、正しいであろう。

●「若武者初陣の図」

宮城県角田市角田 八幡神社

年代不明

『角田市の文化財』<sup>(96)</sup>第十二集では、「若武者初陣の図」とする。色彩鮮やかで馬も躍動的に描かれているが、構図は「巴御前」と同様、左

(90) 『余目町の絵馬』、余目町教育委員会

(91) 『岐阜県博物館調査研究報告』第3号、岐阜県博物館

(92) 『碧南市文化財新指定記念目録』、碧南市教育委員会・碧南市文化財専門委員会

(93) 『龍ヶ崎の絵馬』、龍ヶ崎市歴史民俗資料館

(94) 『戸田の絵馬』、戸田市秘書課市史編纂室

(95) 『郷土の絵馬』、日本民俗資料館・松本市博物館

(96) 『角田市の文化財』第十二集、角田市教育委員会

側にはやはり巖石が描かれており、神功皇后と見るべきであろう。

ところで、この同じ絵馬を、『宮城の絵馬』<sup>(97)</sup>では「勿来関」とし、副題に「八幡太郎義家」とする。また、茨城県龍ヶ崎市馴馬「日枝神社」も、「八幡太郎義家図」とあった。これについて説明しておこう。『千載和歌集』<sup>(98)</sup>巻第二・春歌下に、源義家朝臣（八幡太郎義家）の歌が一首採択されている。

陸奥国にまかりける時、<sup>なこそ</sup>勿来の関にて  
花のちりければよめる  
吹く風を <sup>なこそ</sup>の関と 思へども  
道もせにちる 山ざくらかな

この歌は、題詞によれば、永保三年～寛治元年（一〇八三～七）の「後三年の役」の時、八幡太郎義家が、奥羽の豪族清原氏の乱平定の途次、通過した「勿来の関」で、道も狭くなるばかりに散りゆく山桜を見て、よんだ歌である。「勿来の関」は、福島県いわき市南部と推定されている。

青森県中津軽郡岩木町百沢の高照神社の「勿来関図」<sup>(99)</sup>は、寛政十二年（一八〇〇）のものであるが、山桜咲く中を馬に乗ってすすむ義家が、色彩鮮やかに描かれている。しかし、「勿来関」、「八幡太郎義家図」をはじめ、以上のすべての絵馬には、「山桜」は描かれていない。共通して、画面向かって左側、弓弭の先に「巖石」が描かれているのである。したがって、現在の絵馬集編纂の担当者にとって、題材の典拠が不明であっても、絵馬を描いた江戸時代の絵師にとって、はたまたその依頼主にとって、その画材は周知のものであって、絵師および依頼主を含めた民衆にとって、「犬譚」はごくあり

ふれた題材であった。

## 第五章 江戸時代の朝鮮観の諸相② — 民間神楽 —

### (1) 東北の山伏神楽—早池峰神楽

宮廷神楽とは別に、民間芸能としての神楽が日本の各地に存在する。岩手県に早池峰山があるが、この早池峰神楽を山伏神楽ともいい、真言系早池峰派の山伏の集団によって伝承されてきた芸能である。早池峰神楽には、早池峰神社の奉納神楽「<sup>たけ</sup>岳神楽」と、大償神社の奉納神楽「<sup>おおつぐない</sup>大償神楽」の二派がある。

『社風御神楽<sup>神事</sup>』<sup>(100)</sup>は、岳神楽が神道化、つまり「社風」化したもので、表紙に文化二年（一八〇五）九月九日に「改始」とあって、この年から「社風」化して、改めて始められたものである。これに「三韓退治」がある。

<sup>三韓退治</sup>さんかたへじの幕出し

よふよふホウかみかきやあハイイイイイ  
<sup>宿所</sup>すくねのまぐ出し

せんよほほふホウぬさたつろ

<sup>神功皇后</sup>じんぐこんぐのしゃもん

おふ我是ぢんぐこんぐなり。天の御神……と、続くが、このままでは意味が取りにくいので、昭和の写本『早池峰神社岳神楽本』<sup>(101)</sup>の「三韓征伐」を紹介する。

#### 三韓征伐

幕出し ヨホホー ハイ神垣ヤハアイヨイ  
ヨイヨイヨイヨイヨ

同 ヨホ…… 幣立ツルト

神功皇后 オゝ我ハレ神功皇后ナリ。天ノ  
大神ノ詔ニハ、是レヨリモ、<sup>ひつじきる</sup>未申ニ

(97) 『宮城の絵馬』、東北歴史資料館

(98) 新日本古典文学大系『千載和歌集』

(99) 『岩木の絵馬』、岩木町教育委員会

(100) 『日本庶民生活史料集成』第十七巻、「民間芸能」、三一書房

(101) 『日本庶民生活史料集成』第十七巻

當ツテ新羅百濟高麗ノ国アリ。彼ノ  
国コソ根無キ惡鬼<sup>あまた</sup>数多集リテ、我ガ  
朝マデモ魔国ニセント暴惡ヲナシケ  
ル。是レニ依ツテ、汝武内宿祢、自  
ラ守護ス。退治スベシノフ

武内      オ、新羅百濟高麗ノ国ニハ、数  
万里ノ海上ニテ人民ノ通フ事、難カ  
ルベシ。御神託ニ寄ツテ、住吉大明  
神ニ祈誓ヲ掛ケ、惡鬼猛龍ヲ平ラゲ、  
天ガ下、<sup>おだやか</sup>穩ノ政ヲ為シ賜ヒ

幕出シ      三韓ノ〜惡鬼共ハ、雲ヲ霞ニタ  
ナビキ渡ツテ、浮島原ニ草木ノ上モ  
谷々ニモ、チツキハ更ニナカリケリ。  
惡鬼共ハ心ノ儘ニ見得ニケリ

(二皇子ト惡玉ヲ退治)

宿祢      惡鬼猛龍ヲ鎮メタリ。疾々出デ  
神遊ビシ給ヘ

「新羅百濟高麗」の「根無キ惡鬼」が、日本  
を攻撃してきたので、神功皇后が武内宿祢に命  
じて、「惡鬼猛龍」を鎮めた、というものであ  
る。新羅百濟高麗の「日本攻撃」説については、  
次節で述べることにする。

この神楽「三韓征伐」は、早池峰神楽のもう  
一つ「大償神楽」でも演じられていたことは、  
大償系の『江刺御神楽記』<sup>(102)</sup>にも、「三韓韓」<sup>(ママ)</sup>  
があることでわかる。神楽「三韓征伐」は、遅く  
とも、文化二年(一八〇五)より以前から、東  
北の早池峰の地で演じられていた。

## (2) 島根・大元神楽―塵輪―

文化七年(一八一〇)成立の『御神楽舞言立  
目録』<sup>(103)</sup>は、<sup>おおもと</sup>大元神楽の神楽本である。大元神  
楽は、現在は島根県<sup>おうち</sup>邑智郡桜江町、石見町、川

本町、瑞穂町、江津市の一部、那賀郡の一部し  
か残されていないが、近世末期までは石見地方  
全域にわたって存在した。<sup>(104)</sup>

神楽『弓八幡』に、日本を攻撃し仲哀天皇と  
戦ったという「塵輪」が登場する。

### 弓八幡

神      抑是ハ人皇十四代の主、仲哀天皇とハ  
朕ガ事也。去レバ、異国より来ル塵輪と  
云もの身に翔有<sup>つばさ</sup>て、虚空を飛行し神通自  
在の強敵、数千騎を随ヘ攻来て、日に千  
人の味方を亡す。凡、朕官軍の中に是に  
敵するもの不<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>有。丸十<sup>(ママ)</sup>禅万乗の位  
徳を以て、是を退治せばやと存る也

鬼      あれに立向ふなるハ、いか成ル神ニて  
ましますぞや

神      ヲ。朕ハ是、此日本の主也。汝ハい  
かなるものぞや

鬼      ヲ。我ハ今度日本征罰の大將軍たる  
塵輪といふもの也。汝一命惜む物ならハ、  
早く我レに国ヲ譲りて、此所を立去ベシ

神      アラ愚也。汝何程、飛行神通軍術、他  
に起るといへども、朕又、天神地祇を頭  
に戴き、十禅万乗の徳ニ神変不測の弓箭  
を以て、汝が運命とゞめん事、只今の事  
成

鬼      アラおかしや、なさらハ一合戦仕らん  
(舞)

切      今迄荒たる強敵ハ、神徳国徳弓矢の威  
徳に忽ち治り、今こそ目出度大日本正八  
幡の御神徳、有難かりける次第也。

「日本征罰の大將軍」の「塵輪」が、「数千  
騎」を従えて日本を攻め、「日に千人」を殺し  
た。仲哀天皇は、「十<sup>(ママ)</sup>禅万乗の位徳」によって、

(102)『日本庶民生活史料集成』第十七巻

(103)『日本庶民生活史料集成』第一巻、三一書房

(104)観光資源調査報告『大元神楽』、財団法人観光資源  
保護財団

たちまち退治した。

『神楽舞歌集<sup>(105)</sup>』は、表紙に「大正拾五年拾月改装」とあるように、大正時代のものであるが、「石見江川中流兩岸地帯に於ける江戸期の神楽内容」を「類推するに足る好資料<sup>(106)</sup>」とされるものである。『塵輪』は、さきの『弓八幡』を改作したものである。

#### 塵 輪

抑是は、人皇拾四代のみかど足仲津彦天皇と自か事なり。此度異国より数万騎を引率し、せめ来る其中に塵輪と申て、身につばさ有ものとび来り、凡、まろが官軍の内、是に敵する者一人もなし。まろまつた天津御親、日の神のみいずを頭に戴き、神変不思議の弓矢を以、安々と退治せはやと思ふなり

#### 武 磨

是は〜有難き命詔、畏奉り候。塵輪其儘さき置候得ば、万民のなげきは申に不<sub>レ</sub>及、先は玉体安穩の程も思<sub>ほ</sub>つか<sub>レ</sub>なし。早速、御退治被<sub>レ</sub>遊候へは、天下太平、民安全と存奉候。是に打物献し奉る

#### 天 皇

いかに武磨、塵輪来ば、早く吾に奉問せよ

#### 武 磨

かしこまって候。みす内へ語上し奉る

#### 幕内より

何条、何事でや

#### 武 磨

先達て仰付られ候塵輪、只今黒雲にのり来り、速くかちう弓矢の御用有て、可<sub>レ</sub>然と存奉候

#### 幕内より

心得申たり

#### 鬼

あれにまします御神は、いづれの神にでましますか

#### 天 皇

おゝ。吾は是、人皇拾四代の御門なり。汝は何なるものやらん

#### 鬼

おゝ。吾は是、今度日本征伐の大將軍たる塵輪とは我事なり。汝等一命をおしく思はゞ、此日本を我に渡し立退よ。立退さらに於ては、官軍皆殺にして、此日本を吾手に入ん事いかに〜

#### 天 皇

あら、おろかなり〜。汝し何程飛行軍術、他に越ゆと云ども、まろ又、天神地祇を頭に戴、天のはじ弓矢のはゝ矢の威徳を以、汝が運命いとゝめん事、只今の事なり

#### 鬼

あう事、おかしやな。さあは命をかぎりたゝかひ、勝負を決せん

この「塵輪日本攻撃説」は、大元神楽で初めて創作されたものではない。既述の鎌倉末期成立の『八幡愚童訓』甲に、

倩、異国襲来ヲ算レバ、……仲哀天皇ノ御宇ニ二十万三千人、神功皇后ノ御代ニ三万八千五百人、応神天皇ノ御宇ニ二十五万人

……

と、文永・弘安の蒙古襲来までの「十一箇度」の「異国襲来」があったとし、

……其中ニ、仲哀天皇ノ御時ハ、異国ヨリ責寄ントテ、先ヅ塵輪ト云者ノ、形ハ如<sub>二</sub>鬼神<sub>一</sub>、身ノ色赤ク、頭ハ八ニシテ、黒雲ニ乗リ虚空ヲ飛テ日本ニ着キ、人民ヲ取殺

(105)『日本庶民文化史料集成』第一巻

(106)『日本庶民文化史料集成』第一巻、「石見大元神楽



ス。

と、「身ノ色赤ク、頭ハハ」つある「塵輪」を創作した。

「十善ノカニテ塵輪ヲ降伏シ給ン」と決意した仲哀天皇と「塵輪」が、山口県の「長門ノ国豊浦ノ郡」で戦闘したとする。「塵輪」は仲哀天皇の矢によって、「頸射切ラレテ、頭ト身」の二つになって死ぬ。同時に、仲哀天皇も「流矢」にあたって死ぬ。「新神功皇后譚」では、この「塵輪」との戦いでの仲哀の死は、神功皇后「三韓征伐」のキッカケとし、それ以降の物語の前提となるほど、重要な位置をしめるのである。

この荒唐無稽な「塵輪」譚は、平安時代の院政期から主張され、そして鎌倉時代を通じて流布した「新羅日本攻撃説」<sup>(107)</sup>に依拠して、創作されたものであった。改めて、民間神楽に取り入れられ、演じられたのである。

### (3) 大元神楽—犬譚

『御神楽舞言立目録』には、「乾珠満珠譚」と「犬譚」の二つとも取り入れられた『皇后』がある。まず前半部分を紹介する。「神」が神功皇后、「武」が武内宿祢である。

#### 皇后

神 抑是ハ神功皇后といへる神也。然れハ、先帝仲哀天皇ハ異賊の流箭に空しく崩御ならせ玉ふ。其仇を報わんため、此段、異国へ渡らばやと存る也

○ いかニ武内の臣

武 御前に候

神 臣も兼て存の通り、先帝異賊のために空しくならせ玉ひ、是によって、朕袖のかわく間もなきハ、波かけの岸の如く、

胸の思ひの晴ざる事、常闇の代とやいわん。むば玉の緒の絶なん事も恨めしく、此度思ひ立、偏ニ其仇を報んと、自甲青弓箭を帶し、只今異国へ向ハバやと存候。臣も俱々、妙計を廻らし候へ

武 さん候。謀といつば、此度異国の合戦船軍ハ必定に候。去によって、海神の宮より干満の二玉を御借被成候得かし

神 其玉の徳用ハいかに

武 さん候。其玉の徳というば、先干珠と申を満潮の中へ投れば、忽潮干潟に成り、然る処へ満珠を投れば、元の蒼海と相成承りて候

神 左様ならハ、其宝玉を借て参候へ

武 畏て候。是ニ二玉を借て参り候

神 あら悦バしや。早く異国へ渡らふづるニて候

武 御尤に候。とく〜御急ぎ候へ。御供仕り候わん

ここまでの前半である。後半の「頭」とあるのが、新羅王である。

#### (舞)

武 あれに見へたるハ何ものぞや

頭 ヲ。我ハ是、新羅国の大王也。斯宣ふハ日本の大王よな。去レバ、先帝仲哀天皇ハ軍中ニて、流矢の中、むなしくならせ玉ふ。其仇を我国へ報わんと、思ひも寄らぬ事成り

#### (舞) 干珠を投玉ふ

頭 あらふしぎやな。蒼海ハ干潟と成ル。イデ〜、船を乗捨て、神功皇后を手取にせん事の嬉しさよ

#### (舞) 又満珠を投玉ふ

神 あれを見よ。武内大臣。新羅王が水に

(107) 拙稿「殺生と和光同塵と諏訪大明神と神功皇后と」

『鷹陵史学』第二十号、仏教大学鷹陵史学会

溺れて苦しむ有様を

ここまでの、「乾珠満珠譚」。以下が、新羅王降伏の場面、つまり「犬譚」である。

頭 いかに、神功皇后へ申上度事の候

神 何条、何事ぞや

頭 サレバナ。日本の神軍とハ知らずして、かゝる<sup>あさましきでい</sup>浅間敷体<sup>あさましきでい</sup>に罷成て候。此上はいかゞ致さん。今より我、末々に至る迄、長く日本の犬となり、年々不<sup>レ</sup>怠貢物を捧げ、決して敵対申間敷候間、只々一命をバ御助被<sup>レ</sup>成候へ

神 成程、汝が云通り、今より永く日本の犬と成り、年々貢を怠らず、子々孫々迄も随ふならば、其証拠を石面に記し、一命をば赦し与ふべし。末世に伝へて、年々の貢、必々怠る事なかれ

頭 一々有難き<sup>みことの</sup>勅り、畏り奉りて候。更ラハ、大船数艘を催し、目出度御帰陣を御見送り奉らん

神楽『皇后』は、単に、石見地方で演じられただけでなく、広島県の芸北地方でも演じられた。芸北とは、昔の安芸国北部という意味で、現在の山県郡と高田郡を中心に行なわれてた神楽を、芸北神楽といっている。『皇后』が収録されている芸北神楽の『御神楽舞言立全』<sup>(108)</sup>は、天保五年（一八三四）書写のもので、大元神楽の台本を書き写したものであった。江戸後期、芸北神楽は大元神楽の影響のもとにあった。次の『江戸末期芸北神楽言語唱歌集』<sup>(109)</sup>も、大元神楽の影響を受けたのちの台本で、『三韓征』<sup>からおさめ</sup>の該当部分だけを紹介すると、

皇后ノ詞

……汝らがそのさま犬に似たれば、狗の門をまもるごとく、此遠の朝廷をひたふるに

護れ、その印ニ、その方等が面体に、犬といふ字を記しかゝむ

とあって、「狛犬」の発生譚の影響を受けたものであろうが、その蔑視性はより深まっている。

次は、大元神楽ではないが、瀬戸内海の島、生口島の名荷の集落（広島県豊田郡瀬戸田町）<sup>(110)</sup>の名荷神楽の台本である。『備後名荷神楽本』は、裏表紙に「元治元（一八六四）甲子秋八月吉日」とある。『異国神祇次第』は長いので、これも該当部分だけを紹介する。

……干珠満珠の玉を借り、新羅国へ渡らせ給へは、新羅王申様ハ「日本は小国故に、女人を以て大将とす」と云ければ、其時、皇后持せ給ふ干珠の玉を、大海へ入させ給へば、潮干上り、異国数万騎の者共悦ひ、干すにおり責来ル。其<sup>(77)</sup>干珠の玉を取上ケ、満珠の玉を入させ給へば、五拾壺種の潮一度に満ち上り、波は宝来山と成給ふ。其時、新羅王ハ不<sup>レ</sup>叶とて、皇后の御前に参り、頭を地に付、「是より後は、永く日本に随ひ可<sup>レ</sup>申」。三ヶ国<sup>(77)</sup>の大王、日本の犬と成。また、別に、

又は、後の世の印とて、皇后突き給ふ鉾を、新羅王の門前に立て置き、其の上に、大般石の岩に、「三ヶ国の大王は、日本の犬なり」の書附給ふ。

とある。このように、文化文政期から以降の中国地方に、「干珠満珠譚」や「犬譚」を題材にした神楽が、広く行なわれていたことが確認できる。

芸北神楽の伝承された地域は、江戸末期に国学の勃興があり、その影響で石見地方よりも神道色が濃く、内容も『古事記』や『日本書紀』<sup>(111)</sup>の内容にそって、改変されている場合が多いとされる。文化文政期は、国学の勃興期で、国

(108) 『日本庶民生活史料集成』第十七巻

(109) 『日本庶民生活史料集成』第一巻

(110) 『日本庶民生活史料集成』第一巻

(111) 『日本庶民生活史料集成』第一巻、「芸北神楽能本」

学は地方でも神職を中心に浸透し、中国地方でも地方神道学者によって、神楽に大きく手を加えられ、『古事記』や『日本書紀』にそって改められ、仏教臭が排除された<sup>(112)</sup>。事実、『弓八幡』の「十禅万乗の位徳」は、「十善万乗の威徳」であろうが、この文言は『塵輪』には削除され、より神道色が強められている。また、『三韓征』には、「東より出る日、さらに西にいで、緑鴨川の水、さかさまに流んまでに、……」とある文言は、『日本書紀』神功紀の記事に影響を受けたものである。

しかし、基本内容の「塵輪」、「干珠満珠」、「犬譚」の記事は、『古事記』や『日本書紀』に依拠したものでなく、国学の影響如何にかかわらず、国学者の出現以前に存在した「演目」を、踏襲したものであった。既述の『弓八幡』には、

仲哀天皇、塵輪ヲ退治シ玉フ説、三部古語拾遺等ニモ無<sub>レ</sub>之、雜書説ニシテ雖<sub>レ</sub>難<sub>レ</sub>用、帝ノ武徳ヲ顕サンガ為<sub>ヲ</sub>、雜樂ノ中ニ加<sub>レ</sub>之モノカ。

とする割注があるように、「雜書説」として流布しており、すでに「雜樂」の中に取り入れられていた。文化七年（一八一〇）の『御神楽之巻起源鈔』<sup>(113)</sup>にも、『皇后』について、

皇后 神功皇后三韓を征伐し玉ふ御神功を像を設け、一番の舞となすものなり。  
尤、皇后干満両玉を海神に求め玉ふ事、俗説に近く、又火々出見尊の御事に相似たりといへ共、雜樂なれば是を改めず。

とあり、「干珠満珠譚」は「俗説」として流布しており、また「雜樂」としてすでに舞われていたものであった。

## 第六章 江戸時代の朝鮮観の諸相③

### －浄瑠璃・歌舞伎－

#### (1) 享保年朝鮮通信使と浄瑠璃

享保四年（一七一九）、朝鮮通信使が来日した。一行は、九月四日に大坂に到着、京都には十一日に入り、二十七日に江戸浅草東本願寺に到着した。近松門左衛門の『本朝三国志』と、紀海音の『神功皇后三韓責』の二つの浄瑠璃が、この朝鮮通信使の来日を当て込んで上演されたものであることは、通説<sup>(114)</sup>となっている。門左衛門は、座付作者を勤めていた大坂の竹本座で、二月十四日、『本朝三国志』を上演した。

『本朝三国志』の第四段。

高富久吉（豊臣秀吉）が、「我此度、異国追討の出陣、神功皇后三韓退治の古例を引」、朝鮮侵略勝利祈願のため、伏見より大坂の住吉社参詣に出発する。住吉の浜近くの茶屋で、加藤正清（加藤清正）が久吉に侵略の準備完了を伝える。久吉は正清に、「三韓の絵図」の入手と、名護屋城までの出船を命じ、自身は住吉社に参詣する。

第五段の冒頭は、

高富朝臣久吉公、異国の合戦勝利を得、三韓大王、日本の御下知に従はんと血判。  
敵の鹹<sup>きりみ</sup>取持せ、帰洛有。洛東に耳塚をきづかせ、……

で、始まる。

織田春長（信長）父子の菩提のため、大仏を造立。供養の日「御代長久」を祈って、「異国の合戦」を「人形あやつり」の趣向に仕立てさせる。「御前あやつり 男神功皇后」上之巻で、

ㄱ集」解説

(112) 観光資源調査報告『大元神楽』

(113) 『日本庶民生活史料集成』第一巻

(114) 藤井紫影校註『復刻近松全集』第十一巻、『本朝三国志』解題、思文閣出版。『日本古典文学大辞典』、「本朝三国志」の項、岩波書店。

高麗国遼東大王に、「毎年の貢物怠る事」を怒って、「武将高富久吉」が攻撃してきたと言わせ、下之巻では、加藤正清が、生け捕った高麗国の遼東大王に、「神功皇后の先例を守り給はゞ、命を助けん」、つまり、神功皇后の時のように朝貢すれば、命を助けると言う。そして、高麗王が、

大王、冠を地に付、「子々孫々に至る迄、長く日本の奴と成、貢物を献じ、御下知を守り申べし。命を助け給はれ」と、誠をつくし申さるゝ。

と命乞いをし、子々孫々、「日本の奴と成、貢物を献」じる、と誓った。つづいて、

ヲ々、珍重〜<sup>いけどりふんどり</sup>虜分捕の首耳をそぎ、耳塚を築かるべしと、<sup>ことば</sup>詞も未だ終らぬに、高麗人を引寄せ〜、かたはし耳をそいでけり。

と「耳切り」の場面がつづく。ついで、加藤正清（清正）と小西如清（行長）の兩人が、

（捕らえた）牧司が両足、両方へ引張って、ヤァゑい〜、二つにさつと、<sup>うなぎ</sup>鰻を裂くより易かりけり。

と、「股裂き」の場面になり、「御棧敷」で見物の久吉が扇子をあげ、「ヲゝ、めでたい。めでたい。できた〜」と喜ぶ、というのが、「御前あやつり 男神功皇后」の粗筋である。

近松門左衛門が『本朝三国志』に「耳切り」の趣向を取り入れた背景には、徳川幕府が「回答使兼刷還使」や「通信使」の一行に、「大仏殿」の参拝の強要、必然的に「耳塚」を示威してきた事情がある。万治二年（一六五九）刊行の堀正意の『九卷本 朝鮮征伐記』<sup>(115)</sup>に、

朝鮮の賊、剽を車に載せ、大坂・伏見・洛中を渡し、諸人に見せ、東山大仏殿の前に

塚を築き、収め入れ、僧を供養し、弔ひ給ふ。日本末代までの威光赫々たれば、鼻塚と名づけ、兒童も其徳を頌せり。朝鮮人来朝の時は、国の為に死せし者なりとて、これを祭りけりとぞ聞へし。

とあるように、通信使一行への「耳塚」誇示は、「日本末代までの威光赫々」たる事項として、認識されていた。近松門左衛門は、このような時代風潮をあてにして、『本朝三国志』を制作し、受けをねらったのである。

一方、近松の競争相手の紀海音は、『本朝三国志』の上演を意識して、座付作者をしていた豊竹座で、五月十五日、五段の浄瑠璃『神功皇后三韓責』を上演した。これまた、朝鮮通信使の来日が、民衆の関心を呼んでいた事情を計算したものであったことは、内容そのものが明瞭に物語っていた。

浄瑠璃『神功皇后三韓責』<sup>(116)</sup>は、神功の「新羅征伐」以前に、忍熊王子の反乱や、武内宿祢の息子・呉人、その妻・いはれ姫の道行、それに不老不死の徐福までからませて、筋立てが展開する。問題の第五段は、

……新羅国の大王、<sup>もも</sup>百の寮を引つどへ、とぐるは<sup>やぐら</sup>の櫓に昇り、「<sup>まて</sup>扱も日の本のたをやめ王、三韓を攻め取らんと、兵船波を乗くだき、数万の兵、百済高麗攻め破ると聞つれど、我王宮は唐土一の要害にて、四方に海をかゝへたり。案内知らぬ日本の<sup>よせて</sup>寄手、水屑と成を<sup>みくづ</sup>着にせん」と酒肉の<sup>なる</sup>もたいを用意するゑびす心ぞ、愚か也。

で始まる。

先陣が「高麗国を切りなび」き、二陣が「百済国を責ふせ、今ははや新羅一国」になって、「急ぎ誅罰有べし」と新羅を攻める。そして、

(115)『通俗日本全史』第二十巻、早稲田大学出版部、大正二年

(116)海音研究会編『紀海音全集』第五巻、清文堂

「呉人、<sup>うしろ</sup>後に立かゝり、大王を取て伏せ」て、  
「新羅大王を日本の呉人生捕と、高らかに名乗り立、味方を指してひつ立、御陣の<sup>ほとり</sup>辺に引」きたてると、新羅の大王が、

神国の聖主に誓って申さく。命は軽く、国は重し。朕が命は召さるゝと共、国を子孫に立給はゞ、<sup>あめつち</sup>天地と共に永く従ひ、貢を献じ奉らん。

と「<sup>こうべ</sup>頭をさげて平伏」すると、神功皇后は「御気色おだやかに」、

汝が命をたすくる条、今より末世末代迄、  
我国の奴と成証拠を子孫に示さんと、がゝたる岩根に向はせ給ひ、たらじゆ真弓の鉾を指し、弓弭は墨を含めるとく、我筆先の勢ひを、代々の末迄残さんと、「三韓王は日本の<sup>なり</sup>犬成」と、大文字に書き給ふは、彫て立てたるとく也。

そして、「城中へお火放ち、新羅百濟高麗の三韓ともに攻め従へ、日本指して」凱旋した。このように、享保四年、通信使来日を見込んで制作した浄瑠璃は、秀吉の朝鮮侵略と、「犬譚」に題材を求めたものであった。

## (2) 宝暦の浄瑠璃と歌舞伎

『<sup>かんむりくらべやし</sup>冠競和黒主』は、<sup>はりこし</sup>壕越二三治（菜陽）の作品で、宝暦三年（一七五三）江戸で上演された。二三治は宝暦～安永期（一七五一～八〇）の江戸の代表的な歌舞伎作者であった。

安永三年（一七七四）刊行の『<sup>(117)</sup>役者全書』三によれば、宝暦三年、京の嵐三右衛門座から江戸に戻り、市村座で「京土産」として、「やつし黒主狂言、<sup>せいらい</sup>齊頼の鷹、三韓の犬の趣向」を取り組んだ『冠競和黒主』を上演、「大当り」を取った。「三韓王、<sup>あんばい</sup>仮に塩梅よし屋、せいら

いの清兵衛」を、松本幸四郎（翌年、四代目団十郎襲名）が演じた。

『<sup>(118)</sup>歌舞伎年表』第三巻、宝暦三年十一月一日に、粗筋があり、まとめると、

幸四郎の三韓の王、逆君のセイライ、日本を亡さんと、雨を封じて早魃させ、ようとする。小町が雨乞をしようとするので、小町が雨乞の願をやめさせん為、女房に云ひつけ、小町に愠気を、「勤めさせ」、失敗させようとする。

次に、其身も日本人と成り、清兵衛と改め、長崎丸山の<sup>けいせい</sup>傾城女郎花に惚れて、心を尽し、塩梅よし屋

「と、姿をやつし」ている。そこで、「惟仁を豊若に仕立」て、清兵衛が「三韓の王」であるか、どうかを見分ける「手がかり」を教える。

三韓の王、今ハ清兵衛と名のる。犬といふ字を印シに、敵討テと教ゆる。

丸山にやって来た惟仁は、「塩梅よしに紙入を返し」、知り合いになる。そして、

額に犬といふ字を顕さんため、酒事に色々無礼しかけ、腹立てさせんとする。

さて、三韓の王は、酒席になり、「無作法にあひても堪え」、また、離別した女房が登場し、「何かなしにリンキするを、胸に収め」、必死に、「額に犬といふ字」が表われないように、我慢をする。

次に女房が、訴人に行くを見てセキ上げ、女房を刺殺せしゆゑ、額に犬といふ字、顕はれしも知らず居る所を、女郎花に見付られ、是非なく本名を明かし、……

と、つづくが、以下省略。文化十二年（一八一五）刊行の『花江都歌舞伎年代記』<sup>(119)</sup>卷之四に、「敵討<sup>かたきうち</sup>の場まで大当り大評判」とある。

(117) 芸能史研究会編『日本庶民文化史料集成』第六巻、三一書房

(118) 伊原敏郎著『歌舞伎年表』第三巻、岩波書店

(119) 『花江都歌舞伎年代記』、歌舞伎出版部、大正十五年



宝暦九年（一七五九）十二月二十三日より、大坂中の芝居で、豊臣秀吉の朝鮮侵略を背景にした歌舞伎、『仮名草紙国性爺実録』が上演された。真柴久吉（秀吉）自身「朝鮮国を従へん」と朝鮮に出陣し、「早三韓を切り取」った。一方、大明国高砂の国性爺・鄭成功は、「邪法妖術を常」とするので、久吉自身が「此国に乗り込」んで「攻付給へば」、高砂は落城し、国性爺は行方不明になる（「口明」）。京都大学図書館蔵本の「口明」では、朝鮮国の兵船が到着し、貢物を献上し、朝鮮王の妃を信忠の嫁にすべきとする、朝鮮滞在中の久吉の書簡を読む場面<sup>(120)</sup>がある。

国性爺は、「久吉が留守を幸ひに、六十余州を手に入れん為、味方を招く。某は七草四郎といふ者。我妖術は蛮国に尊む七草の幻術、髑髏を以、其姿を現」わし（「二つ目」）、久吉を「当の敵、国の敵」として、「七草四郎と改名して、邪法妖術を以、日本を覆さんと、一揆を企」だてる。（「三目」）

「大切」で、久吉の首をねらう「朝鮮国の余類の者」曾呂利新平が登場し、久吉にその正体を見破られる。

新平 「エゝ、無念やな。久吉が首取て、『日本の將軍は三韓の犬也』と、国の恥を清めんと此国へ入込、そろりといふ馬鹿者と成て居るも、そちが首を取らんため、顕れるからは破れかぶれ。久吉、覚悟。

久吉 『「三韓王は日本の犬なり」と、神国微妙の宝剣を守護する久吉。畜生の我達、邪道外道の国性爺などが、我に近寄り討んなどとは、及ぬ事、叶ぬ事じゃ

はやい。

新平 「すりゃ。神国の威力には叶わぬか。  
エゝ、無念なナァ。

この『仮名草紙国性爺実録』は、近松門左衛門の『国性爺合戦』<sup>(121)</sup>の評判にあやかって作られた一連の「国性爺文学」のひとつである。『国性爺合戦』は、正徳五年（一七一五）に大坂の竹本座で初演されている。韃靼のため滅ばされた明帝の妹・梅檀は、九州の平戸の地に逃れ、そこで和藤内に救われる。和藤内の父・老一官は、明国の旧臣で諫言のため日本に亡命し、日本女性を妻としていた。明国の危機を知った和藤内（国性爺）は、父母とともに明国に渡る決心をする。門左衛門はその場面を、

和藤内慎んで「……此儘直に御出船……御出陣」と勇みしは、三韓退治の神功皇后艫舳<sup>とくしゅう</sup>に立ちし荒御前を、今見る如き勢なり。父は大きに感心し、「ヲゝ、潔し頼もしし」。  
（第二、もろこしおね）

と、形容する。

次の場面もある。松浦の住吉明神の神前、梅檀への和藤内の妻のセリフに、

……惣じて此住吉と申すは、船路を守りの御神にて、神功皇后と申す帝、新羅退治の御時、汐干玉・汐満玉を以て、御船を守護し、舟玉神と申すなり。（第四）

とある。

宝暦十三年（一七六三）四月十三日、大坂竹本座で近松半二・竹本三郎兵衛作の浄瑠璃『山城の国畜生塚』<sup>(122)</sup>が初演された。畜生塚とは、秀吉に処刑された豊臣秀次の首を埋めた塚を、畜生塚と名付けたとする『川角太閤記』などの逸話による。秀吉の朝鮮侵略の後日談として、

(120)『歌舞伎台帳集成』第十三巻、勉誠社

(121)『歌舞伎台帳集成』第十三巻、解題

(122)岩波文庫『国性爺合戦・鍵の権三重帷子』

(123)叢書江戸文庫『近松半二浄瑠璃集』一、国書刊行会

朝鮮国王の臣下・木曾官が、曾呂利新左衛門になりすまして、真柴久次（豊臣秀次）の家臣となり復讐を企てるという趣向は、『仮名草紙国性爺実録』によったものである。

初段・大序の「朝鮮国王宮の段」は、日本人が全く登場しない。朝鮮について、

朝鮮国をしろし召、成宗皇帝十八年。抑此国は其古へ、辰韓馬韓弁韓とて三つを合せて貢物、金の<sup>もたい</sup>匭欠事なく。

と、貢物の金の入ったかめを欠かしたことのない国だとする。日本から「貢物を献ぜよとの書翰」がくる。成宗皇帝が、

昔、三韓といひし時、倭朝の神功皇后、我都を犯し、「日本の犬也」と石に彫付けし程の猛国。

といって、木曾官を釜山に派遣する。「倭国より書を送りしは、一つの計略」で、「日本の宰相真柴大領久吉」が、みづから「大軍を随へ蔚山郡」まで押し寄せてきた。「太平に馴れし朝鮮人、日本の武威に<sup>おじ</sup>聞怯して、我先に逃」げさった。報告に戻った木曾官は、成宗皇帝に都を立ち退かせる。

木曾官は日本に渡り、曾呂利新左衛門になり、久次（秀次）の家臣になる（三段、口）。曾呂利が仕組んだ偽りの久吉（豊臣秀吉）の使いに、久次は切腹を命じられる。曾呂利は介錯となり、久次の首を落し、「骸を踏飛」ばす。難じられた曾呂利は、正体を明かし、久次を畜生に仕立て切腹させた理由を語るが、「尋常の勝負はせず。畜生の名を取らせ腹切らすとは……、日本の武芸には叶はぬ故か」との責めに、木曾官は「我国<sup>あまたたび</sup>広しと云ながら、小国の日本に<sup>はづかしめ</sup>辱」を受ける事数多度」といい、次のセリフが続く。

其水上<sup>みなもと</sup>は、神功皇后、我唐土に押渡り、新

羅百濟高麗の荒き夷の国々迄、切從へし太刀風も、尖き弓力、石面に「三韓の王は日本の犬也」と、彫付けられし国の悪名、夫より千年百年の星霜を重ね、今朝鮮と国名は変れ共、変らず剥げず、石面に猶も恥辱はありありと、畜生国と余国迄さみせらるゝ其恨み

を「報はず共」、つまり晴らすことが出来なくとも、「せめて日本の久次に、畜生の名」をつけたのが、「山城の国畜生塚」の「因縁」だとするのである。（四段、切）

### (3) 明和年の歌舞伎

宝暦十四年・明和元年（一七六四）度の朝鮮通信使は、江戸で国書交換を行なった最後の通信使であった。その三年後の明和四年（一七六七）みさめ 正月十八日、江戸の森田座で歌舞伎『皆覚百合若大臣<sup>(124)</sup>』の興行があった。

百合若は姉玉嶋の媒酌で、伊勢の浜萩と夫婦となる。酔った百合若は、天竺徳兵衛にぶたれるが、「異国の毒矢<sup>あた</sup>に中りし時、助けられし恩あるゆゑ、無念を堪える」。百合若は徳兵衛に、玉嶋と姉と弟であることを明らかにし、神功皇后の「舟木の櫓」を、徳兵衛に「差付けバ恐るゝ故」、徳兵衛が「三韓の戎」であるとわかる。天竺徳兵衛は、皇極帝に「遠矢」をかけるが、「帝に神矢に打たれ、三韓の怪達王」と姿を現わし、「弓の弦にて縛」られる。皇極帝は実は、百合若の姉玉嶋であった。この歌舞伎は、ほかに高良明神や神功皇后が登場する。

翌年の明和五年（一七六八）二月十六日、京の市山座で、『傾城桃山錦<sup>(125)</sup>』の興行があった。角書に「三韓王者日本犬也」とある。「大序」の造物は、

(124)『歌舞伎年表』第三巻

(125)『歌舞伎台帳集成』第二十二巻

舞台一面の山の谷間の気色。舞台先に立石、  
「三韓の王は日本の犬也」と、書付有。

とあって、その傍らに「三韓の王降列王」と、  
「亡魂」の長慶・義経の三人が、すでに登場し  
ている。慶応大学図書館蔵の「絵尽し」<sup>(126)</sup>の上  
半分中央に、「三漢大王ハ日本犬也」の石があ  
り、それをはさんで、右に「三韓の王降列王」  
が、左に長慶と義経が描かれている。

長慶のセリフに、

降列王。エ、恨めしや、無念やなァ。己  
三韓の帝の時、神功皇后唐土へ押渡り、思  
ひの俣に打勝て「三韓の王は日本の犬也」  
と、其ごとく石面に記し、めでたく帰朝し  
給ふ。

とある。「三韓の王降列王」は、「其無念」を晴  
すため、神功皇后の「石面」を持って、「己が  
術をもって此日本を覆さん」と、日本へ渡っ  
てきた。「降列王」は山中に住み、「仙術を行」っ  
て千四百年の寿命のある「蝦蟇」となり、「ご  
つつ草」をしがみ、「千四百三十七年」がたっ  
た。しかし、あと三年で術が消えることを知る。  
この期間、国は「朝鮮」と名を改め、真柴久吉  
は朝鮮に渡り、「死人の山を築き、血潮は大海  
を紅」に染めている。そこで、「三韓の王降列  
王」は、日本に残る久吉の養子久次を滅ぼさん  
と思ひ立つ。

一方、毛利輝元は、不老長寿の「草」を求め  
山中に入って、「三韓の王は日本の犬也」と書  
いた石碑を見つけ、

朝鮮は昔の三韓なれば、彼神功皇后の御筆、  
「三韓の王は日本の犬なり」と遊ばされた  
る筆跡。絵馬にも書けば、犬打つ童べも知  
る所と……。疑ふ所もなきはこそ神功皇后  
の御筆。朝鮮に有べきこの筆跡が、此山に

れいれいと有ルは、

と疑問に思い、「此国の大王、日本を覆へさん  
と、邪法」をもって、日本に渡ってきたと判断  
する。「三韓の王降列王」は、常陸之助になり  
代わり、「波走丸の剣」と「十束の剣」の二ふ  
りを奪ひ、山中に帰りそこで輝元に出会う。輝  
元が「朝鮮の山馬の皮」で作った「沓」を燃や  
し、「三韓の王は日本の犬」と叫ぶと、「降列  
王」は煙に苦しみ、石碑の文字が「降列王」の  
胎内に入って、消え失せた。

「二つ目」。真柴久次は、本物の常陸之助を  
「波走丸の剣」を奪ったと疑う。常陸之助は言  
訳立たず切腹しようとする。「降列王」は大雲  
院になりすまし、久次の館に忍び込み、常陸之  
助が切腹するを見て、搗臼<sup>うす</sup>を手で割ると、臼に  
「三韓の王は日本の犬也」という文字が現われ、  
「われと誰とか思ふ。昔神功皇后に亡ぼされた  
る三韓の主、降烈王とは某じゃわやい」と名乗  
り、

鼠の巢も同前の日本の大将は女衾人、我大  
国を亡ぼされたる無念サ。刺<sup>あまつさ</sup>へ皇后が、  
「三韓の王は日本の犬也」と書付たる口惜  
さ。骨髓に通って、何卒日本を覆さんと、  
千四百四十年の蝦蟇の法をもって寿命を保  
ち、日本へ押渡り、……

といい、最後に身を消す。

#### (4) 寛保期と天保期

浄瑠璃『百合稚高麗軍記』<sup>(127)</sup>は、『皆覚百合若  
大臣』と同様、百合若物の一つで、大坂豊竹座  
で寛保二年(一七四二)三月三日、初演された。  
天平六年(七三四)、百合若の家臣・別府仙條  
宗澄親子は、一年前に蒙古追討に出陣したが、  
蒙古平定後高麗に向かい、高麗王・崔烈王劉障

(126)『歌舞伎台帳集成』第二十二巻

(127)関西大学図書館蔵

と結託し、日本攻略を企てている。百合若は高麗征伐の勅をうける。

### 第三、「蜺虹が原の段」。

高麗国の大湊、日本町の「蜺虹が原」は「神功皇后の宮地」で、ここにある「文字を彫し大石」は、

往昔、神功皇后三韓を切したがへ、長く日本の奴となし、弓鉾をもって石面に、「三韓王ハ日本の犬也」と記し玉ひし

ものである。

「神詣」も「日々に威をま」し、八月一日は、「例年の祭礼」として、「老若男女」が群集して「押合イへしあひ」、「今年はいつもの祭より賑やか」であった。そこへ、高麗王崔烈王劉障が、右軍将孟湛と棘寺館張噌をひきつれ、「清道の旗、幡の旗」を「風に吹なびか」せてやってくる。神功皇后の「石面を見上、見おろし」た高麗王のセリフ。

誠に軍ハ時の運とハいへ共、いひがいなき百済王ハ、日本の神功皇后に大国を攻やぶられ、叶ハぬ時ハ潔よく討死ハせすして、のめのめと降参し、アレ、あのこつく、「三韓の王ハ日本の犬也」と石面に彫付られ、長く日本の奴と成しハ、末代末世国の恥。我此、鬱憤やむ時なし……

高麗王は、「会稽の恥辱」をそそぐため、日本に「攻むへき時節」を狙っていたところ、百合若が強力無双の市郎丸をつれて、「釜山海の湊」に攻めてきた。結果、右軍将孟湛は、弓で射ち殺され、崔烈王劉障と棘寺館張噌は、日本に連行される。

最後に天保期の例をひとつ。『弥生の花浅草祭』<sup>(128)</sup>（「三社祭」）が、天保三年（一八三二）三月、江戸中村座で初演された。浅草寺の境内の

浅草神社（三社様）の三社祭を当て込んだものである。三社祭は、現在は新暦の五月十七、八日に行なわれるが、江戸時代には、弥生三月に行なわれたので、「弥生の花」という。

上巻は、常磐津を地にした三社祭の場。

「弥生中ばの花の雲。鐘は上野か浅草の、利生は深き宮戸川、誓ひの網の往昔や。三社祭りの氏子中。

正面の段幕を切って落すと、山車人形の姿で、上の方に、神功皇后（四代目坂東三津五郎）、下の方に、武内宿祢（二代目中村芝翫）登場。

「扱も、神宮皇后のそのいさほしは、異国まで勇威を示す。一張の弓の勢ひ巖壁に、『三韓の王は日本の犬』と、ゑり付け給ふなる。

「そばに老ひ木の武者一騎、軍慮も年も武の内、外に類もあら夷。安々なびき随ひしも、一つは是なる銘珠の徳。

「ヲ、その干珠満珠こそ、すでにこの地へ、軍船諸卒と供に出汐の、八十嶋千鳥とも衛、むらむらかもめ声そへて、沖に浮き寝のちんりちりちり、ぱっと異賊も龍波の、水や空なるわだつ海、そことも知らぬ汐路より、海龍王の欣然と、捧げ出たる二玲の玉、奇瑞はまさにありがたき。

「君の姿に誰も手を、息長姫のぼっとりと、たけく、やはらぐ恋の道。

……略……

「されど力はますら男に、優りはすれど劣りなき、君臣和合の香椎の宮、高良の神と今も世に拝れ給ふぞ。

とある。

高良の神とは、干珠満珠を借りるため龍宮に行った使者で、新羅との海戦で、干珠満珠の投

(128)『歌舞伎名作選』第十四巻、創元社

げ入れ役であったところから、別名玉垂宮と呼ばれる神である。かくて、『弥生の花浅草祭』は、「犬」譚とともに「干珠満珠」譚を取り入れたものであった。ところで、坂東三津五郎と中村芝翫の顔合わせは、非常な人気を呼んだという。

## 終章

水戸藩編纂の『大日本史』<sup>(129)</sup> 卷之二百三十二、諸蕃一、新羅上の「皇后以<sub>レ</sub> 所<sub>レ</sub> 執矛、樹<sub>二</sub> 於新羅王門、以為<sub>二</sub> 後葉識<sub>一</sub>。矛今猶存焉」の割注において、『愚童訓』甲や『太平記』の「皇后以<sub>二</sub> 弓弰<sub>一</sub> 畫<sub>二</sub> 石上<sub>一</sub> 曰、新羅王日本犬」とする記事が、「二書所<sub>レ</sub> 載、未<sub>レ</sub> 知<sub>二</sub> 何拠<sub>一</sub>」としつつ、『日本書紀』卷第二、神代下十段、一書第二の記事、「火酢芹苗命裔、諸隼人等、至<sub>レ</sub> 今不<sub>レ</sub> 離<sub>二</sub> 天皇宮牆之傍<sub>一</sub>、<sub>（みかきもと）</sub>代吠狗而奉事者矣」に、「附会為<sub>二</sub> 此説<sub>一</sub> 耳」と断じている。また、井沢蟠竜も、正徳五年（一七一五）刊行の『広益俗説弁』<sup>(130)</sup> 卷七・皇妃で、「新羅は日本の狗なり、と岸石に書付給説」について、「諸隼人等、……代、吠狗してつかふまつるものなり、とあるをあやまれるなるべし」といっている。

江戸時代のこれらの指摘のとうり、「犬譚」は『日本書紀』に附会し、創作されたものである。この創作において、唱導僧や説教僧の存在を想定できる。たとえば、『愚童訓』甲の群書類従本の「高麗寺」云々の挿入が、伊豆山権現の唱導僧や説教僧による関与であることが、指摘<sup>(131)</sup>されている。

『愚童訓』は、新羅「日本攻撃」説の形象として、「形ハ如<sub>二</sub> 鬼神<sub>一</sub>、身ノ色赤ク、頭ハ」つ

の「塵輪」を創作したが、仲哀天皇が「塵輪」の流矢にあたって死ぬ直前の描写に、

御心細思食<sup>おほしめし</sup>ケレバ、后ノ御手ヲ取テ、御胸ノ上ニ置給テ宣ク、「生者必滅ノ習、老少上下ヲ不<sub>レ</sub> 嫌。今ヲ最後ト奉<sub>レ</sub> 見事ノ悲サヨ。此<sub>（はらまれ）</sub> 孕<sub>二</sub> 給ハ皇子ナルベシ<sub>一</sub>。相構テ急ギ異国ヲ討平ゲ、王子ヲ即<sub>レ</sub> 位、治<sub>二</sub> 国土<sub>一</sub> 給ベシ」ト申サセ給ケル。

つづいて、

其時、皇后ハ落ル涙ヲ押ツ、<sub>（ばかり）</sub>「異国ノ事ハ御心安ク可<sub>二</sub> 思食<sub>一</sub>」ト計ニテ……

とあるが、この文体とリズムから、聴衆を面前にした語り口を彷彿とさせるばかりか、浄瑠璃や歌舞伎、いや講談の一場面かとさえ、錯覚を覚える。

朝鮮観の特徴は、中世的創作世界—新神功皇后譚—を構造とする点にある。その中世的創作世界は、文字通り創作に創作を累積して成り立った世界である。新羅「日本攻撃」説を大前提として創作し、その形象としての「塵輪」を創作し、「塵輪」の襲来と仲哀天皇の死を創作し、仲哀天皇の遺言の実行としての神功皇后の「新羅征伐」を創作し、神々の参戦譚を創作し、細男を取り込み「乾珠満珠」譚を創作し、「犬」譚を創作し、応神「胎内」指揮譚等々を創作した。

浄瑠璃と歌舞伎では、さらにこの中世的創作世界に附会を重ね、新しい「朝鮮日本攻撃」説を創出した。『冠競和黑主』では、三韓王は日本を滅ぼさんと日本に登場し、早魃をおこさんとしたし、『仮名草紙国性爺実録』では、「朝鮮国の余類の者」曾呂利新平は、「国の恥を清め」んと日本へ「入込」んだ。『山城の国畜生塚』では、石面は「千百年の星霜を重ね」ても「変

(129)『大日本史』、大日本雄弁会、昭和四年

(130)東洋文庫『広益俗説弁』、平凡社

(131)『群書解題』第六卷、神祇部、「八幡愚童訓」(P187)の西田長男の解説



らず剥げず」とあり、朝鮮国王の臣下木曾官は、「其恨み」を晴らさんと日本に渡り、曾呂利新左衛門になった。『傾城桃山錦』では、「三韓王降列王」は、「此日本を覆さん」と「石面」を日本に持ってきた。

結局、朝鮮観は、何のことはない、寓話の世界の上で形成された思想である。にもかかわらず、この思想が、現実世界の規範として歴史的に機能したところに、形容し難い思いを禁じえないものがある。